

## 研修報告書 No 34

研修施設：佐川町立高北国保病院  
四万十町立国保十和診療所

年末年始を含むため、一ヶ月に満たないやや短めの高知での研修は一言で表すと「気付き」の日々であった。

診察において科の隔てはない。さっきまで風邪の話をしていた患者さんが気がついたら皮膚にできた謎の湿疹の話をし、最後は膝の痛みのお話をし、すぐ「じゃあ皮膚科に」「じゃあ整形外科に」とはならない。とりあえずできるところまででも診なくてははいけない。私は大学病院で研修中、皮膚所見や骨のレントゲンを見て、よくわからないとすぐに専門の先生に診療依頼をしてしまう癖がついている。良くないと思いつつも、専門の先生に診てもらえた方が患者さんも嬉しいだろう、早く解決するだろうと都合の良い言い訳をしてきたように思う。

高知での研修中いろんな先生の外来を見学させて頂いたが、もし自分が先生の立場だったら、と考えると、自分の知識のなさや甘えた考えに気付きとても怖くなった。

もうひとつ感じたのは、「医療だけではない」という点である。

今回この研修で、訪問診療、訪問看護、月1回開かれる診療所など普段の大学病院研修ではなかなか体験できないことをたくさん経験できた。

訪問診療では病院からさらに遠くの山奥で寒い家の中一人暮らしをしている高齢者があまりにも多いことに驚いた。

私の感覚では周囲にお店もない、道も舗装されていない、部屋の暖房環境も整っていない、何か起きててもすぐに助けを呼べない、そんな場所で90歳前後の方が一人暮らしをしていることが信じられなかった。

そのため最初はこんな住みにくい所さっさと出て、山の中ではなくせめて麓に住めばいいのに、などと思っていた。そこに住み続ける理由が全く理解できなかったからだ。しかしお話を聞くと、その場所が生まれてから一世紀ずっと住んでいる家であったり、趣味の農業を続けていたい気持ちがあったり、いまさら新しい環境は嫌だったり、と理由は様々だがそこに留まりたい理由を皆さんそれぞれ抱えていることを知った。

「こっち（街中）の方が住みやすいからいい」というのはあくまでも私の価値観であり、その人の価値観とずれていけば、その人にとって「いい」ものではなくなる、そんな当たり前の事に気付かされた。

地域医療はその人にとって一番いいと思える環境を、可能な範囲で全力で支えているような印象を受け、とても興味を持った。医療が生活に密接につながっている。ひとりの人を医学的な知識だけではなく、福祉や社会保障、生活パターンや家庭内の環境、様々な方面から多角的に見ていくことの大切さを学び、これは今後医療に携わっていく中で常に意識していかなければならない点だと感じた。

今回研修に来るまで、僻地医療はずっと特殊な医療であると思っていた。しかしよく考えれば病院や医療スタッフがあふれているのはほんの一部で、こういった状況におかれている病院や診療所の方がよほど多い。むしろ自分が置かれている大学病院の方が特殊であると思った。

24 時間あらゆる検査をしてもらえる。検査結果もすぐに出る。わからなければその科の専門家にすぐコンサルトできる。その環境は非常に恵まれているのだということを自覚した。都心の医療（専門性が高い）と地域の医療（広く初期治療ができる）どちらの医療が良い、ではなく、どちらの医療もそれぞれ重要な役割を担っていると感じた。その二つが上手に連携できる事が一番の理想だが、現実やはり住む地域によって受けられる医療は異なり、それにより緊急の場合は救命の可能性も大きく変わってきてしまう。

自分一人でなんでも完璧にできればそれは確かにすごく偉い。しかしそれはどんどん進化し細分化されている医療分野では到底無理だと思う。

そうではなく、自分一人でできるところまでどうにかしなくてはいけないとき、その「できるところ」の幅を広げられるよう、これからの日々を過ごしていきたいと思った。

以下に 1 カ月の研修で学び得た事項を報告します。